2024.Mar
Vol.33

\今回は/
卒業生
特集

MEISEI UNIVERSITY

JiN-SHA YELL

ジンシャエール

明星大学 人文学部人間社会学科
ニュースレター

DEPARRMENT OF SOCIOLOGY AND HUMAN WELFARE

人間社会学科、略して「ジンシャ」。ジンシャに関わるすべての人にエール（声援）を送ります！

2023年度 卒論発表会

2024年1月17日、恒例の卒論発表会が開催された。今年の4年生は4年間丸ごとコロナの直撃を受けた学生がほとんどなので、いわゆる「社会化」に失敗しているのではないかと少し心配していたが、登壇者の力作をみるかぎり、そんな不安はいっぺんに払拭された。いずれの卒論も社会性のある研究テーマを選び、問題を深く掘り下げている点で学科の伝統は今年も守られたとみることができよう。ただ、コロナの影響がかれらの研究テーマに色濃く反映されていたことも事実である。コロナ禍を通じてわれわれの社会はまちがいなく、人類がはじめて経験する本格的な「デジタル社会」に移った。アルビン・トフラーがかつて『第三の波』（1980）の中で描いた「エレクトロニクス・コッテージ」はいまや現実のものになりつつある。そんなことをあらためて確信した今回の卒論発表会であった。

（下平好博）

研究発表者

UZAWA 鵜沢ゼミ

ワーク・ライフ・バランス（WLB）調査@日野も3年目！

鵜沢ゼミでは、日野市・実践女子大学の須賀先生のゼミと協働して、WLBの取組を推進している日野市の企業のインタビュー調査をしています。その結果を日野市HPに掲載していただき、企業や市民の皆様に参考にしていただくとともに、本調査は学生たちのよいフィールドワークの経験、仕事を見る目の涵養ともなっています。今年度、鵜沢ゼミでは、私が審査委員を務める日野市SDGs推進事業者登録制度審査会で、特に労働・人権・WLBの観点から光るものがあった3社を選び調査に伺いました。その結果は日野市HPおよび学科の『社会学研究報告』に掲載されますので、是非ご一読ください。

鎗田運輸の八王子支店にて

ミューテック35の工場見学

南観光交通でインタビュー

なお、日野市HPのURLは以下の通りです。
「日野市におけるワーク・ライフ・バランスの取組事例をご紹介します（3）」
https://www.city.hino.lg.jp/kurashi/danjo/danjo/1025896.html

（鵜沢）

Kuma moto 熊本ゼミ

埋め立てが進む辺野古の浜

沖縄で学んだこと

二泊三日の沖縄研修を通して、米軍基地をめぐって複雑に絡み合う人々の想いや意見に触れました。特に辺野古の住民への聞き取りをするなかで、「沖縄県民の意思を尊重しない一方的な決定」が、「基地を受け入れるしかない」という選択につながっていることの理不尽さを強く感じました。

また、「基地が何のためにあるのか？」について考えるきっかけにもなりました。日本を守るためなのか、他国と戦うためなのか。それは結局、何をもたらすのでしょうか。

いま世界で起きている戦争や国家間の対立が基地問題に深く関係し、それが沖縄の中での分断に繋がっていることに気づかされた三日間でした。そして沖縄の基地問題は、これからも私たちが考えていくべき「日本の課題」であると感じました。

3年
大中はるひ さん

コンペで奨励賞！

45.1%。これは熊本ゼミでフィールドワークを行なっている高幡台団地の高齢化率です。高齢者を見守る役割を私たち大学生が担えないだろうか？そこで生まれたのが「カードゲームを使った団地の高齢者との継続的な交流」というアイディアです。

交流手段としてのゲームの有効性や、団地と学生双方のメリットなどを先行研究で立証したり、実際に高齢者とやってみて交流がすすんだゲームを実証したりしながらプレゼン資料を作成しました。

ゼミ生を代表してプレゼンを行うことに不安感もありましたが、みんなでたくさん考え作成したスライドには自信があったので、堂々と審査員や他大学の学生の前で発表することができました。

一から考え、自分達のフィールドに出向き、そして他者に伝える経験は、この学科やゼミでしかできなかったと改めて感じます。この経験を大切に、未来のゼミ生にまで続く活動になるようにしていきたいです。

2年
小日向彩 さん

授賞式の様子

沖倉 悠丞さん（荒井ゼミ）

「真面目に勉強し真面目にふざける」ことが出来た4年間

映画部の後輩と

ゼミの仲間と

私の父は明星大学出身であり、当時の学生生活を振り返りながら「大学は、真面目に勉強し真面目にふざけることができる場所だよ」と語ってくれた。私はその言葉に感化され、大学生活ではそれを達成できるように本校に入学した。

しかし、入学した年からコロナ渦となり、1、2年の授業はオンライン中心で、友人を作りづらい環境になった。そんな中、年齢も住んでいる場所も異なる人たちと、オンラインゲームを通じて交流し、雑談をしながら友情や恋愛感情を育むことができ、この経験が後の卒論にまで発展していくこととなった。

3年になると対面でのゼミや社会調査実習を通じ、親身に指導して下さる先生方や、研究や就活について相談できる仲間と交流を深めた。また、SAを通じて後輩とも交流し、その繋がりから映画研究部に入った。就活を早期選考で終えた後は、部活を通じて様々な体験をすることができた。そして4年の最後の卒論発表会では、オンラインゲーム空間における恋愛関係について発表した。

困難な環境の中での4年間、だが私も今では、「真面目に勉強し真面目にふざける」ことができ、大切なつながりを作れた大学生活について話すことができる。最後になるが、素晴らしい大学を紹介してくれ、大学生になっても支え、見守ってくれた父と家族に心から感謝したい。

野水 裕太さん（天野ゼミ）

地域の子ども達と作り上げた公園

コロナ禍だからできたこと

「授業するために学校に通ったのは、なんと3年生から！」これを言うと、周囲の人から「可哀そう」「大変だったね」と言われる大学生活ですが、実際は人生の中でかなり充実した4年間でした。

大学1年時、コロナ禍で出鼻を挫かれました。外出が出来なかったので、4年間のプランニングと読書をした時間になりました。ですがこの「4年間をどう過ごすか」「将来何したいか」を明確にする時間のおかげで、人口減少の時代に負けず、地元の前橋市を後世に残したいという目標と、いつまで自由に遊んでいいか、やるべきことは何かが明確になった時間になったと思います。

後はやるべきことをやる期間以外は、自由にやりたいことをやるだけでした。遊びでは、友達と全国へ旅行、野球、酒蔵巡り、フルマラソンに挑戦。一方では、地元前橋の活性化を目的とし、前橋の地域若者会議に参加。公共交通の普及イベントをし、前橋市長を交えて座談会をしたり、地域の子どもと公園遊具に色を塗るイベントをしたりととても貴重で充実した時間となりました。

自分の自由な行動を支えてくれた親や天野ゼミに感謝し、春からは前橋市の職員として、学生の頃立てた目標により近づけるよう頑張ります。

前橋市長との座談会

下村 茉衣さん（寺田ゼミ）

挑戦し続けた四年間

この大学での4年間は常に挑戦し続けることを意識していました。特に就職活動とNPO法人で行ったデートDV相談員の活動は力を入れて取り組んでいました。大学2年生の時に机上で学んでいるだけでなく、実際に問題解決に携わりたいと思い、相談員としての活動を始めました。活動をしている中で、私は人の声を傾聴して、サポートするようなバックアップ業務が向いているのではないかと考えるようになりました。そこで、就職活動は金融機関の営業職員の人々へのバックアップ業務ができる職種に絞って行いました。第一志望の会社は倍率が高く、インターンシップに参加するために、夏休みも殆どなく困難だと感じることもありました。しかし、キャリアセンターの方々や周囲のサポートもあり、毎日面接練習や自己分析を重ねて努力を継続することができ、第一志望である外資系の金融機関の総合職に合格することができました。

内定を頂いてからは大学生活の集大成である卒業論文に尽力することができ、「デートDVからの回復とは何か？」ということを、相談員など支援者の方や、加害経験と被害経験のある方々にインタビューをすることができました。私は、この4年間でデートDVの法制度が整っていない中で、当事者たちを守るために回復支援や施設を調べる等して最後まで諦めずに向き合うこともできました。人間社会学科の授業でも幅広く社会問題を学習でき、視野が広がりこの学科に入って良かったと思っています。

これからも様々なことに挑戦し続け、より成長した社会人になれるよう尽力していこうと考えています。

デートDV相談対応中の様子

2023年度 卒業生特集

小久保 昴さん（鵜沢ゼミ）

人間力が深まった4年間

3年春季リーグ戦
デッドボール1秒前

この4年間は素晴らしい仲間と先生方に恵まれ、様々な面で大きく成長することが出来ました。物心つく前から始めた野球も続けられました。ケガに悩まされ、納得できる成績は出せない4年間でしたが、4年生ではゲームキャプテンも任され、多くの方に応援してもらえた幸せな野球人生でした。

将来の選択肢を広げるためにも教職課程を履修しました。授業を多く取らなければいけないので正直何度もやめてやろうと思っていました。実際1年ごとに仲間がいなくなりましたが、終わってみれば教育実習などで多くのことを学ぶことができた教職課程でした。

災害による突然の別れを経験する人が1人でもいなくなるように、という想いで東京消防庁一本で3年生の11月から就職活動を始めました。バイトを辞め友達からの遊びも断り、1日10時間の勉強と部活の2つの生活になりました。途中身体を壊しましたが、仲間と励まし合いながら、みんな苦しい中でやってると思うと頑張れました。結果的に合格できましたので、多くの人を救えるように命を削ろうと思います。

最後に、僕の素晴らしい4年間を支えてくれた人間社会学科関係の皆様ありがとうございました！僕と僕以外の人の幸せを願っています（笑）。

愉快な鵜沢ゼミ

松田 望さん（鵜沢ゼミ）

七転び八起き！
大学生活を通じて培った「失敗する勇気」

オンライン社会見学会
＠日野市役所

「大人の目がある学生のうちに、沢山転びなさい」。

オンライン会社見学会の司会で悩んだ際に鵜沢先生がかけてくださった言葉です。自分と向き合うことや失敗から逃げ、安牌な道を選んできた私にとって、深く刺さるものがありました。大学生活の４年間、いろいろな形の思いやりや愛に触れ、「今の環境にいる自分ならどれだけ転んでも立ち上れる」という自信を身に付けた私は、無意識に諦めていた夢を叶えるための準備を始めました。

プレッシャーやこれまで抱えたことのない緊張感に苦しみ、涙をのみながら過ごした日々を支えてくれた家族。あなたなら絶対大丈夫、と最後まで見捨てずに応援してくださった先生。かましてこい、と最終選考前日の夜に電話をくれ、背中を押してくれた友人。

応援してくれた方々のおかげでなんとか最後まで走り抜くことができ、第一志望の企業より内定をいただくことができました。

自分がこれまで救われてきたように、人の心の居場所となるような音楽を創造し、届けたい。4月１日から、この夢を現実に変える為に険しい階段を上るような日々が続くことと思いますが、初心を忘れず、人間社会学科で学び得たことを活かしながら、邁進したいと思います。

オンライン社会見学会＠MK株式会社
司会：松田さん
インタビュアー：小久保さん

志村 百茄さん（鵜沢ゼミ）

WLB調査＠MK株式会社
インタビュアー志村さん（中央）、
岡庭さん（左）

社会学はいつも自分の身近に

私の大学4年間は1・2年がオンライン授業だったため、正直物足りない、もっと沢山行動しておけばという後悔が多くあります。ですがその分、身近な場所にも沢山学びは広がっていることや、新たな興味関心に気づく機会にもなりました。

例えば、社会調査実習で武蔵境のフリーペーパー制作に携わった際は、農家さんや飲食店店主等様々な方に取材を行う中で、武蔵境を盛り上げたいという地域の方々の熱い思いに触れました。それはそれまで距離は近くとも何も知らず遠かった武蔵境の人・町の魅力の再確認に繋がりました。また、ゼミでの日野市企業へのWLB調査では、有名企業でなく身近な所にも案外良い企業は沢山あること等、自分の生活が多くの人に支えられていることを知りました。

これらに気づけたのも講義で多くの社会問題を学んでいたためで、社会学という学問の懐の広さを改めて実感します。皆さんにも後悔の残らないように、本学科で興味のあることは恐れず思う存分学んでほしいです。

卒業後は実習や調査で興味を持った不動産業界に進みます。今後は大学にいただいた特待生奨学金を資格の勉強等に活かしながら、多くの人を支えられる社会人に成長していきたいです。

武蔵境の地ビール用！ホップ畑にて＠亜細亜大学

志村さん

徳永 優里奈さん（本多ゼミ）

コロナ禍での大学生活 4年間を振り返って

社会調査実習・
フリーペーパーチームの5人

徳永さん

毎日大学に通うこと。友人と一緒に授業を受けて何気ない会話をすること。コロナ禍で今まで当たり前だったことが当たり前ではなくなり、日常の大切さに気づいた4年間の大学生活でした。

私は新潟県出身であり、春からの大学生活に期待を膨らませていましたが、コロナウイルスの影響で前半の大学生活はほとんどがオンライン授業であったため、「授業についていけているのか」「友達はできるのか」など期待よりも不安が大きかったです。

大学3年生からは対面授業も多くなり、人間社会学科の特徴のひとつであるフィールドワークも行えるようになりました。私は、社会調査実習を受講し、武蔵境で発行しているフリーペーパー制作に取り組みました。インタビューなど初めてのことだらけで大変なことも多かったですが社会人になるうえで必要なマナーも学ぶことができ、とても貴重な体験だったと思います。

また、人間社会学科で学ぶなかで地元の人々と関わりながら生まれ育った地域に貢献したいと思うようになりUターン就職を決めました。卒業後は、地元の金融機関で働きますが、人間社会学科で学んだ人と人とのつながりを大切にして地元社会に貢献していきたいです。

社会調査実習・鵜沢クラス
後列右から４番目：志村さん、５番目：徳永さん

齊藤 裕太さん（竹峰ゼミ）

「とりあえず行ってみる」

さいたま市内の飲食店「バオバブ」で開催された卒論発表会の様子

埼玉県小川町「霜里農場」を訪ねて。一番左：著者、一番右：木曽大原さん。

2年生でゼミに入り、電気や食料を自給する暮らしを実践されている方々を訪ね、神奈川、千葉、さらに広島にも行きました。古民家の修繕や太陽光発電を作るといった活動を手伝うことを通して、一人ひとりできることを活かして暮らしを支え合う、地域の人々の姿を目のあたりにしました。あらゆる物が見知らぬ人から供給され、お金で買い、豊かで便利な生活の中で「人付き合い」は面倒なものとばかり思っていた僕にとって、フィールドワークで見た光景は新鮮なものばかりでした。

卒業研究では、地元の埼玉県で展開されている有機農業に目を向けました。農地を訪れ、作業を手伝いながら、地域住民と顔を合わせ、身近な関係を築く農家の姿を見て、今までフィールドで見てきた人と人が繋がる暮らしが、有機農業にも通じると確信しました。

卒業論文提出後の今年1月、調査に協力いただいた有機農家の木曽大原さんが、発表会を企画してくださいました。有機農業をはじめ農の営みや人と繋がる暮らしに、強い関心を寄せる方が身近にこれほどいたことに驚きました。「とりあえず行ってみる」を重ねた先に、出会いと学びを得たゼミ活動でした。

恵本 真由さん（竹峰ゼミ）

4年前と大きく変わった自分

「社会調査実習」でのクリスマス会

コロナ禍に見舞われ、茨城県出身の私は予定より遅れ2020年8月に憧れの東京に移り住みました。全ての授業がリモート授業で「本当に大学生になったのか」と悶々と過ごす日々でした。しかし「通学」が始まってからは、授業やゼミ活動、塾講師のアルバイトと必死になっているうちに、あっという間に月日が通り過ぎました。

地元に居た頃とは全然違う生活に戸惑いながらも、なんとか卒業まで走り抜けた大学での学びは、高校以前までに享受してきた授業では知りえなかったことで溢れていました。グループワークでの論文執筆やゼミ活動でのフィールドワークなどを通して、自分と属性が異なる様々な他者と関わる機会が増え、自分や学校という小さな枠にとらわれず外の世界と接する機会を多く得ることができました。複数人で成し遂げるために必要なプロセスや、自分の目、耳、足を使って考えることの重要さを知ることができました。これらは、今後の人生の糧となると感じています。

学びの自由度が高い人間社会学科で過ごし、「社会を支える仕事がしたい」という思いが芽生え、就職先を決めました。「いっぱい稼げて楽な仕事をしたい」と高校生のころ思っていた私が、必死になって公務員になったなんて自分でも驚きです。4年前とは大きく変わった自分が、次は社会人としてどんなふうに成長できるのか楽しみにしています。

GooglePixelを活用したインタビューデータ起しの講座、先生方にも時に教えることも

ゼミ合宿での論文執筆

松永 優佳さん（竹峰ゼミ）

問題意識を片手にフィールドに飛び込む

原爆小頭症被爆者と家族の会「きのこ会」事務局長・平尾直政さんと出会って

同性愛者が望む人と結婚できない状態は違憲状態である」との東京地裁判決後の様子

パソコンとにらめっこをすることから私の大学生活は始まりました。新型コロナウイルスが猛威を振るっていたころに入学した私は、右も左も分からぬまま、オンラインで講義を受けることになったのです。異例ではありましたが、自ら学ぶという姿勢は、入学前に想像していた「大学生活」そのものでもありました。

しかし、2年生で竹峰ゼミに所属したことをきっかけに、それまでの「大学生活」から私は一歩踏み出して、様々なフィールドに飛び込みます。すると机にかじりついているだけでは見えないことがたくさん見えてきました。例えば、同性間でも婚姻できる権利を求めて、裁判で闘っている人たちを目の当たりにしました。また、広島で日本の戦争被害と加害に本気で向き合い、行動している人たちとも出会いました。

学びにたっぷりと時間を費やせる大学生だからこそ、問題意識を片手にフィールドに飛び込み、自分の五感を使って全身を使って考えることが出来ました。卒業間際には出会った友達に誘われ、沖縄、そして韓国にも行ってきました。卒業後も、尻込みせずに現地に赴き、人と会い、学ぶことの大切さを決して忘れることなくいきたいと思います。

筆者

大久野島で毒ガス製造の跡を山内正之さんに案内いただいて

教員の研究活動報告

元治 恵子教授

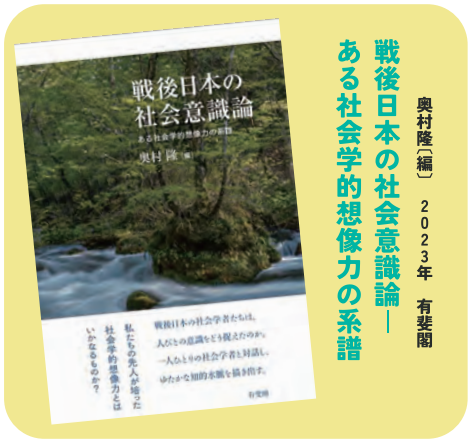
ICPSR OR Meeting参加

2023年10月4日～6日、アメリカ合衆国にあるミシガン大学で開催されましたICPSR（Inter-university Consortium for Political Social Research: 社会科学に関する調査の個票データを世界各国や国際組織から収集、保存し、それらを学術目的での二次分析のために提供する世界最大級のデータアーカイブ）OR(Official Representative)meeting に参加してきました。

この会議は、社会科学のデータ処理や利用促進に関する情報交換やICPSR提供サービスに関するショートプログラムを受講できるものです。Librarian（図書館専門職）の人々と交流したり、ICPSRのサービスのプレゼンテーションを見たり、有意義な時間を過ごすことが出来ました。

ICPSR のスッタフと（右端）

寺田 征也准教授



戦後日本の社会意識論―ある社会学的想像力の系譜

奥村隆〔編〕 2023年 有斐閣

日本の社会意識論・社会心理学を紐解く

欧米の学者に偏りがちな社会学史・理論研究において、日本の社会学（者）を再検討する動きがあります。本書はそうした流れの中、戦後の社会意識論・社会心理学の代表的な担い手を取り上げ、その知的遺産の振り返りと今日的評価を行うものです。

寺田はその中で鶴見俊輔という思想家を取り上げ、その大衆文化論と宗教論を読み解き、かれの仕事が「記号の意味の『共通性』と『個別性』」との着想に集約されるものと結論づけました。捉えどころのない鶴見俊輔の思想の骨子を取り出したところに、本稿の意義があります。

また22年度まで本学科教員であった本多真隆先生も、有賀喜左衛門という農村社会学の大家を扱った論考を寄せています。

竹峰 誠一郎教授

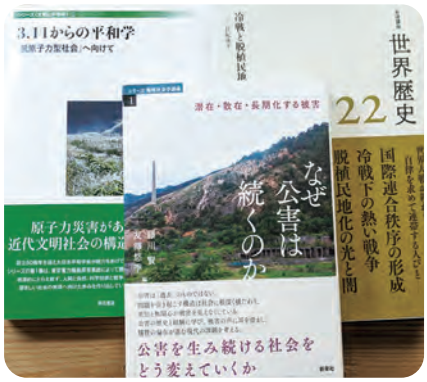
［本の案内］太平洋諸島から日本社会を問う

中部太平洋のマーシャル諸島、マリアナ諸島の現地調査を踏まえた論稿が、以下の本に収められています。

① 核と公害を結ぶ
「重層化する核被害のなかで マーシャル諸島発「核の正義」を求めて」
（『なぜ公害は続くのか：潜在・散在・長期化する被害』シリーズ環境社会学講座1、新泉社）。

② 冷戦って平和な時代？
「オセアニアから見つめる「冷戦」―「核の海」太平洋に抗う人たち」
（『岩波講座 世界歴史 第22 巻――冷戦と脱植民地化Ⅰ 20 世紀後半』岩波書店）。

③ 福島第一原発からの海洋放出、太平洋の海に暮らす人びとから見ると？
「福島第一原発事故の後始末―海洋放出に反発する太平洋諸島の人びとの声」
（『3.11からの平和学――「脱原子力社会」へ向けて』明石書店）。



刊行はいずれも2023年です。関心ある方は手に取ってみてください。

GREEN PRINTING JPPI
P-D10010

恵本さん

湯本さん

ジンシャ独自のキャリア支援

『ようこそ先輩』企画

卒業生も招いた交流会も実施！

前野さん

松田さん

今年度、学科独自のキャリア支援を始めたことを前号（32号）でご紹介致しました。11月には、例年2年生・3年生を対象に実施している「ようこそ先輩」企画を、キャリアカウンセラーの皆様とご相談し、これまでにない、なかなかに大掛かりなものとして実施いたしました。

まずは4・5限の2年ゼミ・3年ゼミの時間。キャリアカウンセラーの林さんの司会で、就活を終えた4年生4人（恵本真由さん、前野達士さん、松田望さん、湯本拡さん）のお話をパネル・ディスカッションの形式で伺いました。その後は学生たちを4グループに分け、4年生4人に順番に各グループを回ってもらい、グループ・ディスカッション。直接先輩たちとやり取りすることで、具体的な就活のポイントや苦労した点などを聞くこともでき、学生たちには【3年】「グループに分かれて質問する機会では1人1人の先輩に聞きたいことを聞けたのでとても貴重で参加できてよかった。」「色々な就活の形や業種に就職する人の話が聞けてとても有意義な時間だった。」【2年】「自分と同じ学科の先輩が就職に対してどのようなアプローチをしていたかなどが知れてためになった。」「先輩方から、様々な経験を積むようにアドバイスをいただいたので、ゼミや部活動はもちろん今まで経験したことのないものにもチャレンジしていきたい。」「学科でこういった場を設けてもらえるのはありがたい。」と好評でした。

次に、学食に場所を移し、4年生4人に加え卒業生22人を招いての「ようこそ先輩交流会」を実施しました。不動産、金融等の企業から公務員として働く方、僧侶として、あるいはNPOで働く方とジンシャらしく幅広くご活躍される卒業生にご参加いただきました。軽食も用意、交流会には1年生から

パネル・ディスカッション

グループ・ディスカッション

交流会@28号館食堂

3年生まで参加できるようにしましたが、【3年】「さまざまな業種の先輩が来てくださったおかげで、それぞれのリアルなお話を聞くことができた。また、先輩という関係性もあり、企業の社員と就活生という関係では聞きにくいことも聞くことができた。」「22人もの卒業生が来てくださったのはすごい。最近の方から何年も働いている方がいて、転職したとか正社員ではないとか、幅広くて良かった。」「就活は焦りや不安なことが多く、真面目で硬い雰囲気があるが、交流会という形で就活関連のことを聞けたため、気負いすぎず楽しく参加することができました。」【2年】「卒業生を含む先輩方との交流会は非常に良い会でした。普段知ることのできない現場の雰囲気や給与など切り込んだ話までしていただき、進路指針の一助になりました。ぜひ来年度以降も開催していただき、自分も語る側になりたいです。」「食事会という形式のおかげで、非常に話しかけやすい雰囲気、また、話している最中も緊張せず会話することが出来ました。」【1年】「とても楽しかったです。お料理も美味しく、話しかければ気軽に答えてくれる方も多く、将来に対する不安も薄くなりました。来年もやるようでしたらまた参加したいです。」というような声が聞かれました。素晴らしいキャリアカウンセラーさんのお陰で、就職率100%、進路決定率86.4%（2月5日現在）と胸を張れる結果となりましたが、私たちジンシャの教員が何より望むのは、一人ひとりが自分が望むようなキャリアを形成していってくれることです。引き続き、支援できるように頑張ります！　　（鵜沢由美子）

発行：2024年3月1日

人文学部人間社会学科事務室
東京都日野市程久保2-1-1　TEL.042-591-5111（代）

明星大学人文学部
人間社会学科HP